

ミネルヴァ日本評伝選「自著を語る」

## 「美しき愚かもの」の復権にむけて



稲賀繁美

### ◆「美術史の世界の「レジェンド」」

矢代幸雄（一八九〇～一九七五年）とは誰か。「ひとこと」で言って、矢代は日本における美術史の世界の「レジェンド」。それが、矢代幸雄『藝術のパトロン』中公文庫版の「解説」にみえる、越川倫明氏の評定である。この書籍は、国立西洋美術館開館六十周年を記念する『松方コレクション展』さらには横浜美術館開館三十周年に因んだ『原三溪』記念展（ともに二〇一九年）に合わせて復刊した（初版は一九五八年刊行）。松方は日本に西洋美術が将来されるようになった時期における最大の収集家、原三溪は横浜本牧に本拠をおいた生糸豪商にして戦前期有数の東洋美術収集家。矢代幸雄はその両者に深く関与した美術史家・評論家だった。

ながらく忘却されてきたに等しい矢代だが、原田マハの小説『美しき愚かものたちのタブロー』（文藝春秋、二〇一九年）の主人公は、他ならぬ矢代。さらに『日本

経済新聞』日曜版にも、中野稔氏により「矢代幸雄の遺産」と題する記事が、二〇二一年九月に三週に渡り連載されている。若手研究者たちによる矢代再評価も近年進みつつある。

### ◆審美体験の深淵へ

その矢代の美的体験を知るうえで、貴重な証言が残る。『藝術新潮』一九五〇年九月号掲載の座談会「日本美術」。出席者は矢代のほか、小林秀雄（一九〇二～一九八三年）と亀井勝一郎（一九〇七～一九六六年）。「心の国宝」と題される写真版特集への併載だが、折から『ゴッホの手紙』（一九五二年）連載中の小林と、戦時中の転向後の著書『大和古寺風物誌』（一九四三年）が話題を集めていた亀井とが、年長の矢代を招いた格好である。法隆寺金堂壁画焼亡の翌年のことだが、矢代はこの年、文化財保護委員会委員に選出されている。

話題が観心寺の如意輪観音に及び、矢代は小林にご覧

になったかと問う。小林が「いやいや」と未体験を告白したのを受け、矢代はこう述べる。「あれはお厨子の中へ、裏から行くといれてくれる。そうすると蠟燭の光で入る。実に驚くべき肉感性ですね。気味が悪いようです。彩色もよく残っているし、肉付きも、六本の腕がどうしても動くと思える。蟹の足みたいに非常にオルガニックに（中略）。やわらかくてここを押せばへこむかというような錯覚を起す。僕はそんな気がして押してみたら、やはり木だったね。へこまなかった」。そんな体験を披露して周囲を圧倒した矢代は、こう言葉を継ぐ。「あれはそういう非常な濃厚なる感覚性からくるミスティシズムを密教というものが予想しているのではないかと僕はつくづく思った」と。

### ◆触覚体験への誘い

ここには錯綜した事態が集約されている。ひとつにはギリシア古典彫刻の「人體美」との類比で飛鳥・奈良の佛像を再評価した和辻哲郎『古寺巡礼』初版（一九一九年）への三十年後の反省。宗教的礼拝の対象は、立体造形の原理とは離反する。「腰のひねり」は新海竹太郎の近代的佛像彫刻に顕著な新解釈だが、「肉感的描写のよさ」ゆえに「佛像を賛美するのはおかしい」。これは、同時期にヴァルター・ベンヤミンが「礼拝価値」と「展示価値」との対立として論じた話題に通底する。



『矢代幸雄』  
稲賀繁美 著  
税込4950円 2022.1刊

いながしげみ  
1957年 東京生まれ、広島育ち。  
現在 京都精華大学教授。  
著書 『絵画の黄昏』（1996年）、『絵画の東方』（1999年）、『絵画の臨界』（2014年）、『接触造形論』（2016年）、  
いずれも名古屋大学出版会 ほか。

一方、信仰には「触れ合い」も欠かせない。なのにな代以降の博物館では、「作品」に手で触れるのは禁忌とされてきた。加えて展示空間の中立な光線の下では、彫像は死んでしまう。揺らめく蠟燭の焰に照らされると、彫塑の陰影は鑑賞者が移動するにつれて変幻し、にわかには生気を帯びる。それはロマネスク修道院の回廊やドイツのパロック教会内陣でも体験する秘跡だが、とりわけ密教では、曼荼羅から発する靈気に直に触れる神秘体験が、信仰の実践においても不可欠だった。そうした重層の襲をなす審美体験が、肉感溢れる如意輪観音との邂逅に秘められていた。